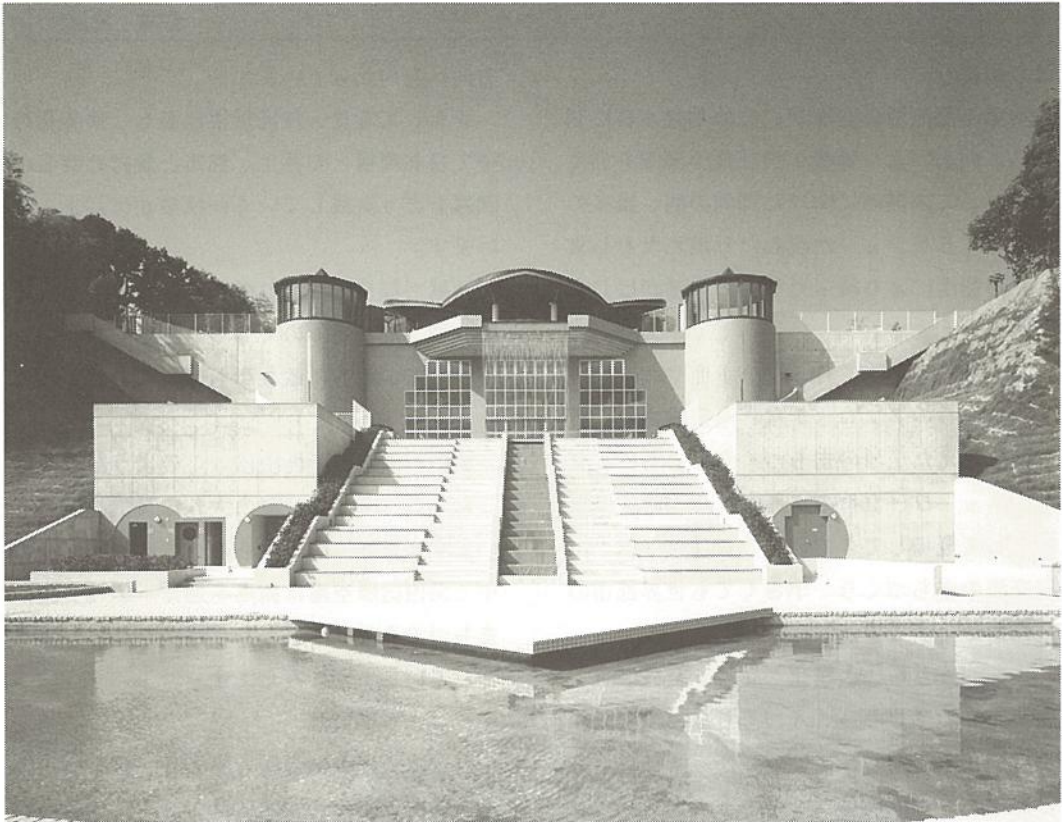


アルパック ニュースレター



「あくあびあ芥川」がオープンしました（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1994年9月1日

- 関西国際空港の開港と広域交流のまちづくり 2
- 川を学ぶ資料館「あくあびあ芥川」がオープン 4
- 丹後和紙の里「大江町和紙伝承館」オープン 5
- ノーマライゼーションの具体化 7
- まちづくりの豊かな発展を展望して 9
- 建都1200でまちをかざろう!! 10
- アルパック素人クルー準決勝進出! 11
- 旧刊新刊書評紹介 13
- まちかど 14

NO.67

関西国際空港の開港と広域交流のまちづくり

金井 萬造

はじめに

待望の関西国際空港が、この9月4日に開港し、いよいよ一番機が飛び立つ瞬間を迎えました。この開港に向けた20年の間、幾多のまちづくりビジョンが現れたり消えたりしましたが開港により待ったなしの本番がはじまったといえます。

この間、まちづくりのソフト面やユーザーの立場からのアプローチなども重視され、行政区を越えた広域のまちづくりとともに、交流やネットワーク型のまちづくりが時代の要請として登場してきています。地域連携、国際交流のまちづくり、小さくても世界都市の展開がその例です。

まちづくりを、広域化、交流、交流産業、産業育成のプロセス、人づくりなどの視点から述べてみます。

まちづくりと広域化

生活圏の広域化や空港・通信網の整備により、グローバル化と情報化が進展し、シンクグローバリー・アクトローカリーの都市づくりの視点が一般化したといえます。

この間、地域（都市）の自立的発展能力の限界もあらわれ、人口30万都市では社会減が自然増を上まわり、人口が減少する状況になっています。

地域の活性化は、生活圏の広域化の中で地域間の連携施策の実行をせまられ、施設の運営、経営面にも、連携、ネットワーク化が重要な課題となりつつあります。

個人の生活レベルでもモビリティと交流圏の拡大、余暇時間の増大の中で、価値観が多様化し、創造的活動による生きがいの発見の

方向へと向かっています。

また、工業化・技術重視社会も、情報化の中で自然環境との共生、都市と農村の共生の課題をどう実践していくか模索がはじまっています。

地域（都市）づくりの視点からみても、地方分権、地域主体のまちづくりとそれへの対応として、地方行政改革も課題にのりつつあります。

関西国際空港の開港は、このような課題にこたえるべく広域交流の大きな役割を担っています。まさに、これらの大きな時代潮流の中で関西国際空港は開港を迎え、広域交流のまちづくりのリーディング機能を発揮しようとしているようにみえます。

キーワードは交流

四全総の総点検作業も終わり、五全総が準備されています。近畿ではずばるプランの見直し作業がはじまっています。その中で、人口が増えない中での、計画フレームをどう考えるかなどが新しいキーワードとして登場してきました。

計画フレームは交流人口を加味した新しい人口フレームが想定され、産業も国際化する中で機能を分担し、付加価値の高い新しい産業構造の構築がさげばれています。

まさに、今までの需要追従のフレームから、需要創造する新しいフレームづくりへと具体の行動が求められています。

このような時代背景の中で、『交流』のキーワードが救世主として一人歩きをはじめ、地域あげての交流のコンセプトの具体化、事業化の取り組みが進みつつあります。

人的交流から交流産業おこしへ

国際交流も、行政・企業から市民レベル、草の根交流へと多様な展開をみせています。

関西国際空港の開港を契機に、世界、特にアジアとを結ぶ関西の各地域との人的交流、文化交流が盛んになり、さらにそれらの積み重ねにより、地域に新しい交流産業が地域産業の中で一定の地位を占める展望が見込める時代を迎えているといえます。

交流産業は今までの観光、コンベンション、研修、学会、文化交流、体験などの人的交流から、さらに地域のインフラ整備、拠点施設整備の上に情報やノウハウ、技術と地域文化の活用・移転、人づくり、組織づくりの要因が加えられてきました。イベントが定着し、新しい産業と雇用を生み出す高付加価値なソフト産業へと発展していく芽を持っています。

これを定着推進していくための基礎条件の整備として、知的インフラ、アカデミックインフラづくりの重要性が増しています。それらのインフラを機能させる人・情報のセンター化、運営体制づくり、発信機能の充実が不可欠となっています。また、交流を常態化させるための事務局、誘客、企画プロデュース機関の設立・充実も課題となってきました。交流産業は時代ニーズにこたえる風土産業

交流は二つの地域間のよいところを学び合うところに意義があり、人的交流が基本となります。従って両者の交流は、ギブアンドテイクの原則であり、相手にギブできる地域のよさをつくり出し、持っていることが条件となります。このギブアンドテイクの姿勢が持続されなければ交流の発展は望めません。

交流の相手（地域・人）は、まさに新しい文化を吹き込む風であり、地域はその外来の客の文化に反応して、地域の歴史的・文化資源を耕す新しい営みをはじめていく大地（土）

です。従って、地域（土）は自らの自律的な振興を求め、外からの風に敏感に反応する構えが必要です。

まさに、交流産業は外からの風に反応して相互に効果をもたらす相互作用で、関西国際空港はその契機を加速してくれたといえます。交流産業育成のプロセス

国際交流は、現実に交流産業づくりの多くの事例と産業育成のプロセスを私達の前に示しています。

例えばアメリカ西海岸のモンレー市（サンフランシスコの200km南方）は、人口3万人ですが、市民運動を奨励し、地域の個性と文化を生かしたイベントを年間百数十件つくりだし、その実践から交流産業が定着し、エージェント、アミューズメント、コンベンションとともに、ワイン生産なども起業化し、次第に地域の主産業であるホスピタリティ産業の地位を確立してきています。さらに、地域の文化活動、草の根市民運動などのボランティア活動が産業化の芽として育っています。まちづくりの観点からみると、人づくり、地域資源の活用の段階から技術開発、そのノウハウの蓄積段階を経て、起業化、資本形成の段階へと進み、行政、市民、産業が三位一体となって地域の振興と地域経営に主体的に取り組んだ展開となっています。

交流産業は、まさに地域資源の活用としての人的交流に着目した新しい時代の産業といえます。



出典：関西空港ガイドブック 日本工業新聞社刊

交流のまちづくりは人づくり、組織づくりが基本

関西国際空港の開港により、国外・国内と関西の交流の窓口が新設されます。それを生かした交流に着目したまちづくりは、地域づくりの主体としての人づくりと組織づくりがその基本となると考えられます。

地域の地道な活動と人づくり、組織づくりのために行政、市民、企業が一体となって取り組むかどうかによりその進展が異なります。

企業活動においても、消費者ニーズの把握も重要ですが、新しい視点として交流活動により、国外・国内のニーズを把握し、交流活動の実践を通じて新しい企業人が生まれてくる時代がくることも予感されます。

都市の産業振興と都市基盤づくりも、関西国際空港の開港を契機として、広域交流の視点での展開を目指したいものです。

(大阪事務所 かない まんぞう)

高槻の芥川を学ぶ資料館

『あくあぴあ芥川』がオープンしました

前田 恭宏

場所は、JR高槻駅より約15分の南平台住宅地と芥川に挟まれた、『芥川緑地』内です。この『芥川緑地』は私どもも参画し、全体計画約7.4haの都市緑地公園で、今年7月に第1期として約3.4haの整備が完成しました。広場、散策路、テニスコート、ゲートボール場、東屋、公衆便所、駐車場の諸施設とともにこの資料館が整備されました。

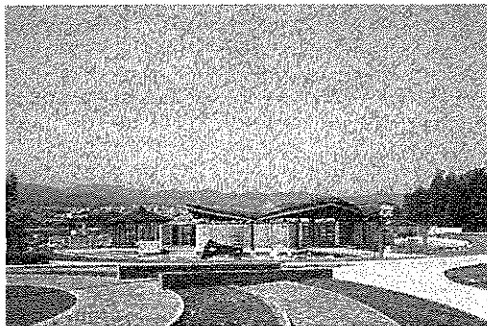
『あくあぴあ芥川』は、水（芥川）とともに発展してきた高槻市と芥川の文化を表現する水に関わる地域資料館です。

構想段階では、高槻・芥川と関わりある産業、歴史、自然を含めた広範囲にわたる資料の収集・展示が検討されましたが、市内の他の資料館との整合、展示スペース等との関係

から調整され、最終的には「芥川を媒介とした生活や生態系を展示し、芥川を学習・確認することによって、市民としてのアイデンティティを育む」ための施設として位置づけられました。

高槻、特に芥川地区の産業は数年前まで営まれた有名な寒天を始めとし、明治期には、綿作、菜種、煙草、銅山等多くの業種があり、特に煙草は一時期、国分煙草と並ぶ程の盛況であったそうです。

「主役は芥川河川景観を中心とする緑地公園であり、建物は裏方として公園に貢献することとした方針に従い、公園内の建物としては目立たせなく風景になじんだ形態としました。



メイン入口



展示スペース（水槽）

これらの方針や立地上の制約、建物の要求条件等から建物の大半は地中に埋まっています。

高台の南側の住宅地から見た形は、蝶が羽根を広げた姿の大屋根が見え、北側の芥川から見た建物は、大屋根、そこから落ちる滝、中央を流れるカナル、階段状の客席が見え、建物の形はあまり感じさせません。

鉄筋コンクリート造4層建、延面積約2,000㎡、断面構成は最上階がメインエントランス・休憩場・池、一層下階が資料館管理事務室、多目的ホール、水槽を上部から眺める渡り廊下、さらに一層下りた階が、芥川の流れを上流・中流・下流として表した3つの流れの水槽と、常設展示ホールで構成されています。展示ホールでは、芥川の歴史、水辺の風景、水辺の生物の生態が紹介され、窓外で落ちる滝を通して、旧集落の風景が望めます。最下階は特別展示室・機械室、公園関係管理諸室、公園への出口となっています。特別展示室外のドライエリアの壁には、摂津峡の地層断面

がモザイクタイルで表現されています。

快晴の7月10日の資料館オープンには関係者と共に参加させていただきましたが、大勢の皆さんが子供達と共に参加され、水槽の前は人だかりができていました。そのなかで熱心に水槽を覗き込む姿は、子供より大人のほうが多いような気がしました。計画当初、対象層を小学四・五年生としたのですが、誤算があったかもしれません。水槽とともに当施設の特徴の一つの滝は快適に落下し、公園の南と北を結ぶという機能の象徴のようです。

またゲートボール場は公園オープン前から利用されており、近隣の人々に利用されやすい公園として踏み出したようです。

オープン時の人々の楽しそうな表情を見ると、都市緑地公園と一体的に造られた地域の資料館が、地域には今のところ成功のようです。より多くの人々に活用される施設となってほしいと思います。

(大阪事務所 まえだ やすひろ)

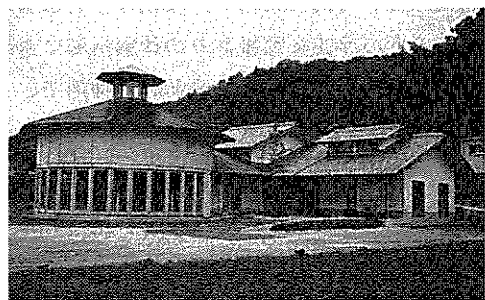
丹後和紙の里「大江町和紙伝承館」オープン

中嶋 秀介

“丹後和紙の里”大江町二俣に7月20日、手漉き和紙作りの体験ができる和紙伝承館がオープンしました。アルパックはかねてより大江町の地域振興計画、観光拠点整備計画等に係わりをもっておりましたが、この度もその流れのなかで計画・設計・監理をさせていただきました。

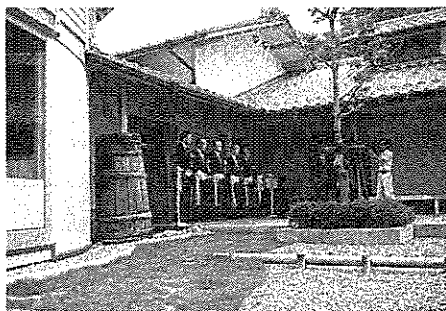
和紙伝承・活用による地域活性化の拠点

丹後の地域では気候、風土が和紙の原料である楮こうぞや三椏みつまたの生産に適し、江戸時代から和紙作りが盛んに行われていました。かつては大江町内でも約200戸が手漉き和紙作りに携



外観

わっていたそうですが、近代化が進むにつれて和紙から洋紙へ、障子からガラス戸へといった社会的ニーズの変化によりこれを生業とするための基盤が弱体化し、現在ではただ一



竣工式

戸のみとなっていました。

この伝統ある手漉き和紙作りを保存・伝承していくとともに、文化・産業・資源の三位一体として活用し、地域の活性化を図る拠点づくりが「大江町和紙伝承館」です。

この施設は、

- ①体験工房：地場産の楮こうぞなど自然原料による手漉き和紙の伝統技術を体験し伝承する体験空間
- ②展示ホール：和紙生産の工程、道具類の紹介及び全国から寄せられた丹後和紙使用の工芸品の展示空間

という2つの機能を備えており、地域住民あるいは全国の人々との交流を基本とした情報拠点として、地域振興に寄与するものです。鄙びた雰囲気かつシンボリックな建物？

建設地は、町内でただ一戸和紙作りを伝承し、この度の手漉き和紙作りの体験指導にも協力されている田中製紙工業所の隣接地で、丹後和紙の里という観光スポットに位置づけられているところです。元伊勢神社（現伊勢神宮の元とのいわれがあり、内宮と外宮がある）に近く、神社周辺に流れる五十鈴川（これも現伊勢神宮と同じ）を支流にもつ宮川に沿って開けた山村の田園地帯です。

私達は和紙のあたたか味、手漉きの優しさ、伝統が醸し出す落ち着きを、鄙びた田園地に来遊する伝統的造形物群として表現しようと思いました。まず、この地が丹後和紙の里と



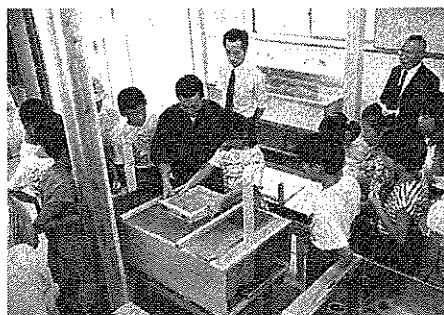
八角形の展示ロビー

して一体的なイメージを出せるよう、手漉き機能や意匠的な面で隣接する製紙工業所と連携させておく必要がありました。体験工房は、建築高さや屋根勾配といったボリューム感、色調を周辺の民家あるいは既存製紙工業所とあわせ、調和に心がけました。一方、公共施設としてのシンボル性も建築デザインに求められる重要な条件でした。展示ロビーは、造形的に異質ながら木造の質感、在来工法による伝統的雰囲気醸し出す八角堂として配置し、印象深い建築となるよう考えました。

建前か建舞か？

建設工事は昨年末から始まり、今年の2月14日から16日にかけてがタテマエでした。

在来工法による八角堂（実際は32角形）の軸組みは五重塔など塔の建立に似て大変に難しく、それまでの打合せの度に建て方の順序や現寸納まりについて、大工さんと共に頭を抱えていました。やはり大工さんの技に頼ることとし、当日私達は、八角形に刻まれた高さ8mの心柱が据え付けられ、傘を開いた様



手漉きを体験する地元の小学生

に登り梁が架けられて行く様子を固唾をのんで見守るだけでした。

ところで私達は、普段よりタテマエを「建前」と書きますが、現場ではこれを「建舞」と書いておりました。私はこの言葉にある種の感銘をおぼえました。日も西に傾き、八角堂の母屋もほぼ納まって今日の仕事もそろそろ置こうかという頃、夕日をあびた屋根の上で最後のカケヤを打つ大工さんの姿は、踊りを舞っているかの様に軽やかで優雅に写るものでした。

大江町では小学校卒業証書に自分の手で漉いた和紙を使うそうです。7月9日の竣工式では、地元の小学生が早速に手漉きを体験しました。楽しそうに、恐る恐る自分のサインを入れた和紙を漉く子供たちの声が響く体験工房から八角形の展示ロビーの側を見ると、大工さんの「建舞」を思い出すと同時に、設計・工事に係わって下さった多くの人々の顔が思い浮かび、感慨無量でした。

(京都事務所 なかじま しゅうすけ)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

ノーマライゼーションの具体化
～八王子市総合福祉センターを見て～
鈴木 美加

「ノーマライゼーション(普通に生活できること)」は福祉計画に関わって何度も聞いた言葉でした。しかし、言葉としてはわかっていても何かピンとこないものがありました。

今関わっている「地域高齢者住宅計画」の中で、地域の中に足りないもの“高齢者も含め市民誰もが楽しみ集まれる場”の事例として、高齢者・障害者・市民誰もが対象としている総合福祉センターの事例を見てきました。

その総合福祉センターは、東京都八王子市にあり、JR中央線高尾駅から徒歩10分程度のところに設置されています。市内に散らばっている福祉施設のセンター的役割を目的に計画されたことから、高齢者や障害者が参加できるのはもちろん、それ以外の一般市民の人達も含め、誰もが活動することが普通にできる場、ノーマライゼーションの具現化を設立主旨とし、「老人福祉センター」「障害者福祉センター」「コミュニティセンター」の3施設の複合施設となっています。

センターに向かう時、歩車分離の道路で、幅員としては車椅子が通れる歩道であるもの

の、車止めが規則正しく並べられ、むりやり詰め込まれているため、どう見ても車道の方が通りやすく、私達の前を行く電動車椅子に乗った青年は車道を通っていました。また、センター玄関は段差解消してあるものの、玄関にたどりつくまでにわずかな段差が数カ所あるため、その青年は他の入口を探しに去っていきました。その姿を見て、私達は「福祉センターなのになぜ？」との疑問を感じながら入口を入っていきました。

施設規模は 8,720㎡と大きいのですが、この職員は正規10名(事務関係での裏方を担当)です。あとは、退職者からなる非常勤職員10名(看護婦さんも含まれ、来館者との対応は主にこの人達が行う)、委託外注者(プールやデイサービスなど)とで運営されています。困っていることは、専門職がいないことで、「浴室の湯が出ず半日機械室にいても何もわかりませんでしたよ。」と、担当者は苦笑いしていました。

ここでの成功の一つは“足の確保ができたこと”です。センターバスの他に路線バスの路線を変更してもらい市内どこからでも来やすくしたこと、そして八王子市は山間部が多いこともありバスが行き届かない人も車に乗ってこれるよう駐車場(これから増台も考え

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

ているほど)を整備したことです。

センターバスは発車バス停で満員になることもあり、ロビーで担当者を待っていると、朝一番のセンターバスから高齢者がどっと降りてきて、受付の高齢者の職員も手際よく対応し、小学生の遠足のようにわいわいがやがやとにぎやかです。

まもなく1階のプール室から案内をしてもらいましたが、扉の前は一列に並んだ人ばかり、見慣れた光景とも思いましたがよく見ると老人40名ほど、迫力を感じました。

2階は主にデイサービスや機能訓練を行うフロアで、一時保護室では障害児とボランティアの女性が遊んでいます。一時保護室はニーズも高く、24時間対応も可能なよう、住宅改造時に個人人の障害程度に合わせた寸法を導き出せる機能を持った特殊浴槽・便所・台所の設備がある日常生活復帰訓練室とセットになっていて、外階段で独立した部屋になっていました。

3階に上がると体育室。高齢者は卓球、お母さん達はバレーボール、若い女性達はエアロビクスと3者がうまく場を分けあって楽しんでいました。また、同階には娯楽室と浴室があり、閉館30分後で娯楽室はもう満杯でした。移動手段としては違うことしかできないおじいさんも昼食のふかし芋を持って毎日(子供は勤めを持っている娘さんだけ)来ており、面倒見の良いおじいさんがいつも一緒に、職員はいっさい関わる必要がないとのことでした。

4階は各種教室でパソコン(満杯)や英語・絵画教室が開かれ、聴覚障害者の横には手話通訳ボランティアが付いていました。この通話者はセンターのボランティア教室の卒業生で、そのままセンタ

ー事業に協力しているとのことでした。

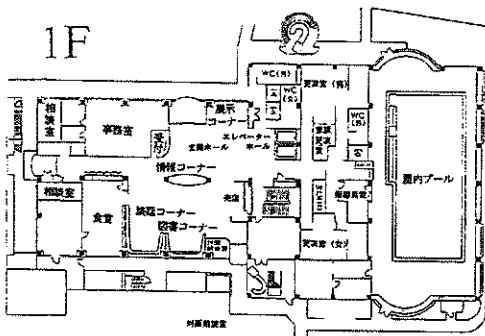
とにかく、「使ってもらう」ということを基本にしているため、細かい規則は設けず、隣接する企業の社員も大会議室を借りたりプールを利用したりと「部屋が開いていれば市外の人でもいいですよ」と柔軟な運営となっています。その反面、商売に使われることもあるので、貸出時の見分け方がかなり難しいとのことでした。

1階に戻るとすでに談話コーナーも市民でいっぱいになっていて、昼前になると心身障害者の人が営む食堂や売店も開き結構はやっているとのことです。この食堂は当初障害者の就業訓練の場として考えていたものが、この不況で就職の場となってしまったそうです。

この施設は、どの階に行っても人の気配がして「生きている施設」との実感を受けます。

特に、視聴覚室ではその時、講座内容に興味があればその場で参加できる「自由参加教室」を開催し、その主な運営は職員ではなくて参加者の中の経験者が取り仕切るなど、ソフトの面でかなり進んだ施設運営がなされていることがわかりました。

まだまだ健常者の側に障害者に対する偏見があるらしいのですが、センターが閉館して約3年、日々の活動を続けていく中で、職員と利用者が、徐々に頭ではなく体でノーマラ



施設平面図 出典：パンフレット

さんきょう 近況 さんきょう 近況 さんきょう 近況 さんきょう 近況 さんきょう 近況

イゼーションを体験しているそうです。

みんなが何かをしにここへやってくる、自由に、気軽に、普通に、そんな賑わいに満ちたセンターでした。

施設へのアクセスと入口の段差が気になったまま、でも何か館内の熱気に押されるようにしてセンターを後にしました。

(東京事務所 すずき みか)

まちづくりの豊かな発展を展望して
-第5回関西まちづくりフォーラムのご案内-
杉原 五郎

2つのシンポジウムに参加

最近、2つのシンポジウムに参加しました。一つは、「自然環境復元研究会シンポジウム」、いま一つは、「まちづくり公益信託全国シンポジウム」です。

「自然環境復元研究会シンポジウム」(尼崎市)には、「身近かな環境づくり—環境教育・市民参加—」の分科会に顔を出しましたが、100名を越える参加者で会場は一杯になり、西宮の地球ウォッチングクラブや三島のランドワークなど、ユニークな環境教育の取り組みが報告されました。

また、「まちづくり公益信託全国シンポジウム」が東京の世田谷で行われるということを知り、こちらにも足を運びました。東京圏を中心に、関西や北海道など全国から300名ほどの参加者が集まったこのシンポジウムでは、まちづくり公益信託の事例が幾つか報告され、まちづくり公益信託の可能性や市民主体のまちづくりを支援するシステムのあり方について討議がなされました。

上記2つのシンポジウムに参加して、「ビオトープ(小自然の保全)」「自然環境の復元」「環境教育」「ランドワーク(草の根

のまちづくり運動)」「まちづくりの公益信託」「まちづくり支援システム」「まちづくり基本法」などといったキーワードが強く印象に残りました。

まちづくりの新たな波(ウェーブ)

いま、たしかに、まちづくりの新たな波(ウェーブ)が私たちの周りに押し寄せてきていることを実感します。

アルパックに就職活動で訪れる学生の方々と話をしていると、「まちづくりに関心を持っています」「都市再開発で美しいまちを創ってみたい」などといった若い人達の言葉に“はっと”することがあります。また、ボランティアで地域のまちづくりに参画する機会がありますが、女性や高齢者などのまちづくりに対する熱意や迫力に圧倒されることもしばしばです。

全国的には、バブル経済の崩壊や急激な円高の進行による日本経済の空洞化など心配なことがいろいろあります。また、国のレベルでは、四全総の総合的点検を受けて、新たな全国総合開発計画(五全総)の策定も近く始まることとなります。こうしたグローバルな動向を注意深く見守りつつ、私は、草の根のまちづくりをさらに豊かに発展させていきたいものと考えています。

関西まちづくりフォーラムの歩み

昨年10月、自治体関係者とアルパックの有志などが中心になって、「関西まちづくりフォーラム」を設立しました。このまちづくりフォーラムは、関西のいろいろな地域において取り組まれているまちづくりの事例を紹介しながら、まちづくりの経験や苦労話などを気楽に交流しようということで始めました。

第1回(93年10月8日)は、豊中市におけるまちづくり支援システムについて、芦田さん(豊中市まちづくり支援室長)より報告を

いただきました。

第2回(11月22日)は、民間による木質住宅群の共同建替えについて、門真市朝日町地区カルチェ・ドムールの経験を、間野さん(間野まちづくり研究所所長)と千住さん(門真市職員)に語っていただきました。

第3回(94年1月31日)は、会場を関西化学術研究都市の中心・けいはんなプラザに移して、学研都市づくりとまちづくりに奮闘されている京都府3町(田辺町、精華町、木津町)の関係課長、地元の住民、研究所の職員の方々に学研都市の印象やまちづくりの苦労話などを話してもらいました。

第4回(5月18日)は、「女性による市民運動からまちづくりを考える」というテーマで、騰さん(尼崎市議会前副議長)に尼崎の経験を語っていただきました。

これまでのまちづくりフォーラムを振り返ると、企画の内容と準備は必ずしも十分ではありませんでしたが、行政職員、市民、研究者、コンサルタントなど多彩なメンバーが毎回30名~40名ほど参加し、まちづくりをめぐる議論も熱を帯びてきました。まちづくりの輪(フォーラム)も少しずつ広がってきたように思います。

第5回関西まちづくりフォーラムのご案内

こうした盛り上がりを踏まえて、第5回の関西まちづくりフォーラムでは、「環境学習とまちづくり」というテーマで、八尾市の取り組みをご報告いただくことになりました。

八尾市では、環境問題に意欲的な女性に対して、地域の生活排水アドバイザーや環境ライフデザイナーが活躍の場を提供しながら、水とくらし、ホテル、星、音、ゴミなど身近な環境問題に積極的に取り組んでおられます。また、環境をテーマとした市民サイドの自主的な活動も活発に展開されています。

環境学習からまちづくりへの課題、行政と市民との連携のあり方、環境問題に対する男性と女性の取り組みの違いなどについて自由な意見交換ができればと考えています。関係方面から積極的なご参加をお待ちしています。

第5回関西まちづくりフォーラムのご案内

日時: 9月14日(水)午後6時30分~9時

会場: 地域計画建築研究所大阪事務所

(JR環状線大阪城公園駅下車約5分)

スピーカー: 東野至法氏(八尾市環境総務課主幹)

中辻えり子さん(環境ライフデザイナー)

テーマ: 環境学習とまちづくり

—八尾からの報告—

会費: 2,000円(情報とお酒持ち込み可!)

連絡: TEL 06-942-5732 FAX 06-941-7478

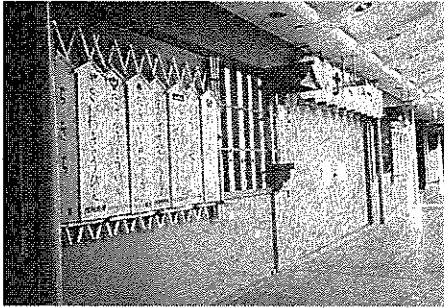
(小阪、杉原、馬場、中室、若林まで)

(大阪事務所 すぎはら ごろう)

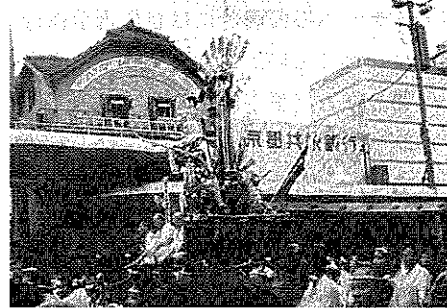
建都1200でまちをかざろう!!

鵜飼 奈弓

祇園祭に大文字送り火という大ページェントも過ぎていきましたが、今年は特に熱気のもった夏の京都でした。特に祇園祭は、近代以降本祭に吸収され同時に催行されていた「あと祭」(1週間後)を復活させ、全国各地の山笠を招致して一緒に巡行するという大きな祭典となりました。全国に現在ある曳山や鉦の発祥は祇園祭に遡れるということから、京都の千二百歳を祝って孫・子が駆けつけたというところでしょうか、河原町通りや市役所前を、締め込み姿の若衆の疾駆(博多祇園山笠)や、飾山おやまばやしに合わせしなやかな腰つきで舞う秋田おほこ(角館のお祭り)が通っていくのは二度と見られない光景だったでしょう。宵山を歩いた時には、各地の参加者



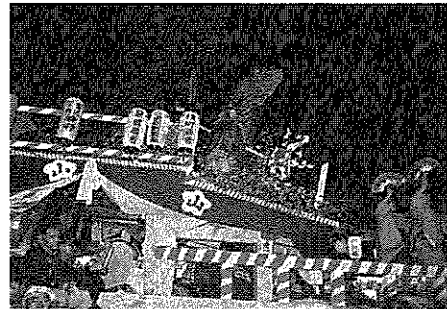
平安建都1200年広場の大きな門



河原町通をはしる「オイッサ」の掛け声と博多祇園山笠



空き家をフラッグで修景



日本有数の名曲と伝えられる節山ばやしにあわせて曳山の上で舞う角館の祭り

との会話のなかで、地元を代表して来たという誇りや「うちのが一番」という思いがひしひしと感じられて、まちおこしの情熱と祭の存続の関係について考えさせられました。

こうしたイベント以外に日常の様々な場面でも「平安建都1200年」が顔を現しており、たとえば少し大きな通りでは、空き家の景観対策のためにフラッグを並べたりしています。空地利用の平安建都1200年広場については色々なメディアで紹介されており御存知の方も多いと思いますが、(模擬店の並ぶお祭り広場で、2年ほど前に梅田にあった『カラズ』を京都の伝統産業色に染め直したようなもの、公共と民間企業の出資による協会が設置している、約1900㎡)この河原町通りに面する門が、紅殻色の大きなもので、昔の関所を思わせます。初めて見た時は夜で閉門していたので、工事現場仮囲いか空き地の修景用のものにしては立派だなあと勘違いしてしまいました。今では格子越しに提灯が灯っているのが見えてなかなか風情がありま

す。

「平安建都1200年」は今年限り。しかし、まちの景観づくりは今後もずっと続いていくべきものです。緑化やカラフルなペイント、建物に見せるだまし絵の導入など、仮囲いの工夫はよく見られるようになりましたが、これを機会に、空き家や空き地、駐車場に対しても、フラッグを利用したり、一見本格的な木塀や門、照明器具等による修景が取り入れられるようになればと考えています。

(京都事務所 うかい なゆみ)

アルパック素人クルー準決勝進出!
～赤白帽の下の闘志?～

角南 禎子

日本の三大祭、大阪・天満の天神祭の前夜祭イベントとして行われるドラゴンレースにアルパックの所員(有志)と、その仲間たちで参加しました。宵宮に行われるそのレースの正式名称は、日本国際龍舟選手権大会。今

年の男子チームの優勝者には世界選手権行きの切符がかかっているため過去5回の大会で最多の79チーム（男子34、女子7、男女混合38）の熱戦となりました。会場となったのは、桜ノ宮公園前の大川で、源八橋から川崎橋までの直線 550m。私達のチーム「ナンジャモンジャモンジュ」は、白いTシャツ・赤白帽子という小学校運動会スタイルでばっちり決めて？！男女混合のレースに出場しました。

大会当日までの2週間は、一回戦予選落ちしないためにビデオでのイメージトレーニング、作戦会議！？。前日には舟に乗っての真昼の2時間練習。そして、当日は朝早くから最後の丘練をし、試合に備えました。みんなの気持ちは徐々に盛り上がってきたようで、はじめは「面白そうだから乗って見ようか」程度だったものが、せっかく出るんだから何とか入賞したいという気持ちに変わってきたようでした。その気持ちの中には、予選を通過して2回戦に進まなければ、控えになっている仲間のクルーが舟に乗れないまま終わってしまうという気持ちがあったと思います。「みんな、なんて優しいんだ！」と感激していたのは私だけでしょうか…。ともあれ、日頃事務所内では見られない皆の緊張した顔、漕ぐときの濡れんばかりの大きなかけ声。一つの舟に乗って、船首の中川さん（アルパックバンドのドラムス）の太鼓を信頼し、前を漕ぐ人にしっかり付いていき、クルー全員が同じものを信じて一つになって頑張れたと感じました。

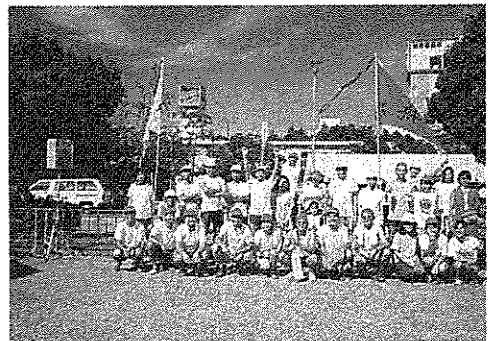
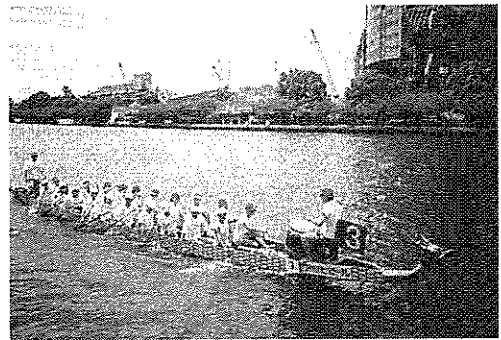
その結果、なんと素人クルーで準決勝進出で13位！（2分53秒12）という信じられない好成绩に、充実した一日を終えることが出来ました。その後みんなで銭湯へ繰り出し、一緒に飲んだ冷えたビールの美味しかったこと…。

次の日、真っ赤に日焼けして、それぞれに背中だの腰、腕が上がらん、お尻が引きつってるだとかをうれしそうに言い合っているみんなを事務所で見るにつけ、「こんな心持ちで（地域の人と一緒に）仕事ができたらいいなー」と思いつつも、そんな余裕もなく今日も仕事にせっつかれている私でありました。

レース一つで大げさな、と思われそうですがきっと龍舟に乗ったクルーや、仕事でも同じような気持ちを味わったことのある人にはこの何とも言えない充実感が分かっていただけのものと思います。こんな心持ちになれたのもクルーのみんなの存在があったからと思っています。

最後に、来年の夏にも出場します。乞うご期待！！

（大阪事務所 すなみ ていこ）



新刊旧刊書評紹介

マイルス・デイビス／クインシー・トループ著 宝島社

『マイルス・デイビス自叙伝』 紹介 西島 芳

ジャズ界の帝王マイルス・デイビス

マイルス・デイビスは、'40年代半ばから'91年にこの世を去るまでの40年以上にわたり、常にジャズ界のトップに君臨してきた偉大なトランペッターである。

この本の魅力は、マイルス・デイビスという人物の生き様を通して、「創造」に対する執着と挑戦のエネルギーに触れられることである。決して妥協を許さないその姿には、「んー、これこそプロフェッショナルだ」と思わず、膝を叩かずにはいられない。

直感的な感性の陰に鋭い分析力があつた

「音楽の創造」に対する彼の態度は、どこまでも厳しく、そして「意外とマメだったのね」としかいいようがない。一般的に、芸術家といえば、そのアイデアやテクニックの多くを直感的な感性に頼っていると思いがちだ。しかしマイルスの凄さは、その分析力の鋭さにあり、かつそのプロセスは驚くほど地道である。彼は、黒人が十分な教育を受けられる環境になく、しかも「理論を知るとフィーリングがなくなる」などという考えがまかり通っていた時代に、猛烈に音楽理論を勉強し、図書館に通ってクラシックの作曲家の楽譜を借りる手間も惜しまなかった。

また、彼は楽器の電機化も積極的に取り入れていくが、それが単なる思いつきでなく、自分の求めるサウンドを実現してくれるテクノロジーとして、徹底的に実験し、分析し、計算しつくされたものであることが、この本から分かる。

メンバーの選抜についても、自分の目と耳で確かめ、妥協を許さない。自分のめざすサ

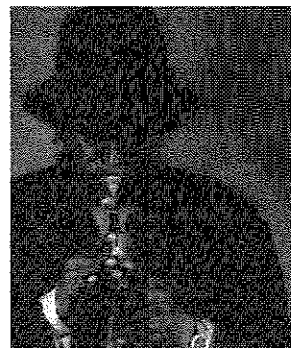
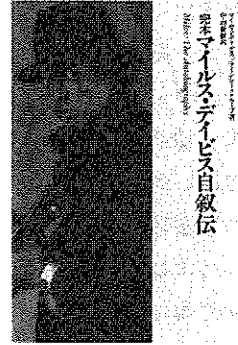
ウンドから外れる音があろうものなら、例えどんな者であっても「おい、ステージを降りろ、この野郎！」の刑である。その点、我が“シャウトはじめ&上方ビックフォー（俗称アルパックバンド）”などは、互いの違い（しばしば“間違い”も）を黙って許しあう譲歩的なバンドである。

「人生は変化であり、挑戦だ」

ひとくちにプロのミュージシャンといっても、長期的な活動スタイルには様々なタイプがある。マイルスは、批評家やファンに決して媚びることなく、独創性を追求し、絶えず音楽的に変化し続けた。その信念は次の言葉に集約されている。

「ビバップの本質は変化であり、進展だ。じっと動かず、安全にしているのとは違う。創造し続けようと思う人間には、変化しかあり得ない。人生は変化であり、挑戦だ。」

（大阪事務所 にしじま かおり）



まちかど

大阪ミミに大阪風?アイスクリーム館が出現

長谷川 めぐみ

難波に一風変わったハーゲンダッツの店が出来たと聞き、探訪してきました。その名も「シルク・ド・ハーゲンダッツ」。

思い切って足を踏み入れると、光の洪水とまではいかないまでも電飾のきらびやかさでミニ遊園地といった感じになっており、背の高いピエロが回転しながらお客を出迎え、そのすぐ奥にはピンクのタイツの大根足が何本もついている円形の椅子があるのに気がつきます。しかもその椅子は「ラジオ体操第一ヨーイ!」といいながら絶えず体を揺らし、座ろうとする客を拒むという不気味な代物なのです。

このあまりに怪しい空間に一瞬くらくらするのを覚えながら更に奥に目を移すと.....ありました!木馬ならず美女のメリーちゃんがクルクル回っているメリーゴーランドが。そのセクシーなメリーちゃん達にはうまい具合に座れるようになっており、珍しさもあってか若い女のコ達が席を奪い合っ(??)ていました。休日には無邪気な子供や、茶髪のお姉さんがアイス片手にこれにしがみついているかと思うと不条理の世界を感ぜずにはいられません。

皆さんにもこの謎の空間を探るべく、戎橋のたもとまで出掛けてみるのをお薦めします。お店を出た時、アイスの味をおぼえていたらあなたは立派な大阪人です!?

(大阪事務所 はせがわ めぐみ)



アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673
- (株)アルパックインターナショナル 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)965-2012 FAX(06)965-2014
- (株)都市居住文化研究所 〒604京都市中京区東洞院通り六角上ル三文字町225・朝陽ビル4F/TEL(075)252-2231 FAX(075)252-4417